市政ニュース

～伝えよう、冒険心と感謝の心～ 植村直己冒険賞20周年記念イベント開催

8月27・28日の2日間、日高文化体育館と植村直己冒険館で、植村直己冒険賞20周年記念イベント「未来へつなぐ笑顔と挑戦」を開催しました。

27日は、日高文化体育館で、歴代の受賞者を招き「植村直己冒険賞20周年の歩み」を映像で紹介し、受賞者が近況などを報告しました。また、日本100名山の制覇を目指す元スキー・ノルディック複合オリンピック選手の荻原次晴さんが、何事にもチャレンジすることの素晴らしさについて講演を行いました。

▲荻原さん（右）も加わって歴代受賞者の近況報告

28日は、今にも雨が降りそうな天候にもかかわらず、家族連れなど約2500人が、植村直己冒険館を訪れ、歴代受賞者との交流や、地元食材を使ったバザー、さまざまな自然体験イベントを楽しみました。

▲冒険家たちのおもてなし「シカ・ブタ肉のいぶし焼き」を食す参加者

▲木を利用したツリーイングに挑戦する子どもたち

～まちづくりへ共同研究～ 奈義町と「先端的まちづくりに関する連携協定」締結

8月31日、本市は奈義町（岡山県）と「先端的まちづくりに関する連携協定」を締結しました。

奈義町は、地域ぐるみの子育て支援や若者定住施策を推進し、平成26年の合計特殊出生率が「2・81」で全国1位です。また、世界水準の現代美術館や歌舞伎などによるまちづくりも行っています。一方、本市は、コウノトリの野生復帰の取組みや、アーティスト・イン・レジデンスなどによるまちづくりを進めています。

今後、奈義町と本市は、全国から注目を集めている双方のまちづくりのノウハウを共有し、さらに新しい施策の共同研究を行うなど、共に日本の先端的なまちづくりに向け、切磋琢磨します。

▲協定締結式で握手を交わす笠木義孝奈義町長と中貝市長（右）

～豊岡の魅力を世界に発信～ 2人の国際交流員（CIR）着任

本市は、国際交流員（CIR）として、カナダ出身のモーガン・アンドリュー・ハレルックさんと、フランス出身のノロ・ランドリアタヒナマナナさんを任用しました。

2人は、外国人観光客の誘客事業に従事し、外国人の目線で豊岡の魅力を世界に発信します。

▲モーガンさんとノロさん（左から）

～主な市政の動き～

【8月】

10日・小中一貫教育全教職員研修会

17日・豊岡市行政改革委員会

19日・アヴェロン県文化イベント「オーブラックの出会い」参加（フランス）

24日・飛んでるローカル豊岡「教育体験ジャーニー」（～26日）

25日・豊岡市文化芸術振興計画策定委員会

・「アジアのまちにおける持続可能な農村に関する国際シンポジウム」職員派遣（～28日・香港）

26日・「永楽館歌舞伎公演」制作懇親会（大阪市）

27日・植村直己冒険賞20周年記念イベント（～28日）

28日・市民総参加訓練・震災総合防災訓練

30日・豊岡市公営企業審議会

31日・奈義町と「先端的まちづくりに関する連携協定」締結

【9月】

1日・豊岡農業スクール入校式

2日・市議会定例会開会（～30日）

・豊岡市障害者福祉計画策定委員会

6日・市内最高齢者・最高齢夫婦祝福訪問

7日・台湾旅行大商談会（～9日）

～神鍋地域における観光誘客の通年化～
神鍋インバウンドプロジェクトチームら「台湾旅行大商談会」参加

9月7日から9日まで、神鍋地域の観光誘客の通年化を図るため、今年5月に神鍋地域の若手事業者が中心となり設立した「神鍋インバウンドプロジェクトチーム」や、官民で設立した一般社団法人豊岡観光イノベーションの職員らが、台湾で開催された「台湾旅行大商談会」に参加しました。

神鍋インバウンドプロジェクトチームは、有識者による講習会の開催や神鍋地域の価値・魅力を分析し、海外向け旅行商品を企画してきました。

商談会の台湾側の参加企業は約200社。本市からの一行は、台北、台中、高雄の各都市で、旅行会社や航空会社の旅行企画担当と旅行商品の商談を行いました。

神鍋地域では、今後、台湾以外に、タイ、シンガポール市場に向けたプロモーション活動も行います。

▲高雄（台湾）での商談

～地域の防災力を高めるために～
「市民総参加訓練・震災総合防災訓練」実施

8月28日、いつ起こるか分からない大規模地震に備えて、全市民を対象とした市民総参加訓練と、旧竹野中学校跡地を主な会場とした市や国・県、各種団体などによる震災総合防災訓練を行いました。

訓練は、多数の家屋が倒壊し火災も発生、沿岸部では津波の恐れもあるという状況を想定。市民総参加訓練では、市民約3万3千人が、防災行政無線放送を合図に、各家庭で安全を確保した後、津波避難訓練や安否確認訓練を行いました。

また、震災総合防災訓練では、大規模消火訓練や、倒壊家屋からの負傷者の救助救出、日赤奉仕団や竹野中学校生徒らによる非常食を活用した炊き出し訓練などを行いました。

震災時は、団結しなければなりません。この訓練で、子どもから大人まで、災害に備える意識を高めました。

▲土砂埋没車両からの救助救出訓練

中貝市長の徒然日記 107
子どもたちにほほ笑みを2

過日「えだまめらんど」という会の方々のお話を聞く機会がありました。双子のお母さん方でした。その中で「買い物のときに双子用のショッピングカートがなくて苦労している」という話が出ました。

「うーん、では、市からお店に話をしてみましょう」

市職員がいくつかお願いに上がったところ、まずA店が早速に2台、入れてくださいました。その顛末をお店への感謝を込めてフェイスブックに挙げたところ、大きな反響がありました。

「双子の母です。（子どもが）小さな頃は本当に買い物が大変で、双子用のベビーカーを押したとしても荷物が持てず泣きそうでした」

「助かります。孫2人を連れての買い物は大変でした」

「大阪で双子の乳児期を生活しましたが、大手スーパーでも見かけず、双子用ベビーカーを押しながら山盛りの重たいカゴを肘にかけて必死に買い物をしておりました」

「子どもが小さい頃に、2人ともカートに乗りたがって前と後ろとにカートを押しながら引っ張りながら、お買い物をして肩がパンパンになっていたのを思い出します」

「A店はわが家から少し遠いですが、頻繁に使わせてもらいたいと思います」

記事が気に入った場合に押す「いいね」というマークは、500件を超えました。

ぼくたちの気付かないところで、子育て中のお母さんたちがこんなに苦労していたなんて。ぼくたちの町の感度がまだまだであり、しかし捨てたものではない、という象徴的な出来事でありました。

いつの時代でも、子どもたちは希望であり、子どもたちのいる風景は最良の風景です。あの台風23号の大災害から立ち上がるエネルギーをくれたのも、子どもたちの存在でした。その子どもたちとその親たちにほほ笑みかける町。それを作るには、ほんの少しの想像力と行動力があればいいのかもしれません。